

# 明代初期の八股文について (2)

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (2)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## (二) 永樂年間

### ①李時勉

『欽定四書文』は、最初に李時勉（名は懋，字が時勉，号は古廉，字で通行する。江西安福の人。洪武七年〔一三七四〕～景泰元年〔一四五〇〕。永樂二年〔一四〇四〕甲申科三甲三十四名の進士。刑部主事（正七品），翰林侍讀（正六品），侍讀學士（從五品），學士（正五品），祭酒（從四品）などを歴任し，正統十二年（一四四七）に致仕する。在任中は，「性 剛鯁（剛直）にして，慨然（慷慨）して天下を以て己が任と爲」（『明史』李時勉傳）し，直言したため何度も下獄する）の「君子賢其賢而親其親 二句」題の八股文をおき，

前輩 經語を用いて能く題義と切比す。故に自己より出だすが若し。之を録し以て制義の初範を存す。○本題の重きは前王の君子・小人の處に繫屬（結び付ける）するに在り。是の作 亦た最も釋詩の體に合す（『欽定四書文』欽定化治四書文・大學・一葉～二葉・「君子賢其賢而親其親 二句」条評語<sup>(1)</sup>）。

と評価する。

では，その「制義の初範を存す」とされた八股文とはどのようなものであったのだろうか。題目は，

詩云，於戲前王不忘，君子賢其賢而親其親，小人樂其樂而利其利，此以沒世不忘也（『大學』傳第三章・第五節）。

の太字で示した部分である。

なお、八股文は、一定の形式にそって作成される。そこで、拙稿でそれぞれの八股文を検討する際には、できるかぎりその形式にそって段落分けしておく。また、出典は、それぞれの段落の後に明記する。

即後世思慕之心，知前王新民之德<sup>①</sup>，

此子曾子言文武新民之止於至善也，使文武新民之功，不止於至善，又焉能使

↙(1)『欽定四書文』の評語は、周振采（周振采：字は白民，号は菰畦。江蘇山陽の人。乾隆の初めの諸生）がかかわっていたようである。『制義叢話』に張甄陶（字は希周，号は楊菴。福建閩縣の人。康熙五十二年（一七一三）～乾隆四十五年（一七八〇）。乾隆十年〔一七四五〕乙丑科二甲十五名の進士。『四書翼註論文』の作者）の発言を引用して次のように述べる。

張楊菴 曰く、……方望溪（方苞）『四書文』を選するに、其の總批・線批は皆な兵曹（兵部）郵寄の周白民（周振采）の改定に由り、然る後に同館に出示す（『制義叢話』巻一・十六葉）。

周振采については、齊召南（字は次風，号は息園。浙江天台の人。康熙四十二年（一七〇三）～乾隆三十三年（一七六八）。乾隆元年〔一七三六〕丙辰科博學宏詞第二等八名の進士）の「周振采小傳」に、

先生 名は振采，晩に自ら菰畦と號す。海内の時文を言う者，山陽の周白民先生有るを知らざるは無し。白民は其の字なり……」（『寶繪堂文鈔』巻七・二十三葉・「周白民小傳 山陽人」）。

とある。

(2) 八股文の形式については、

「清代八股文の題目について」（和歌山大学経済学会『経済理論』第310号・2002年刊）

「清代八股文における破題・承題について」（同『経済理論』第312号・2003年刊）

「清代八股文における起講について」（同『経済理論』第313号・2003年刊）

「清代八股文における入題について」（同『経済理論』第316号・2003年刊）

「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（1）」（同『経済理論』第326号・2005年刊）

「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（2）」（同『経済理論』第327号・2005年刊）

「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（3）」（同『経済理論』第328号・2005年刊）

「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（4）」（同『経済理論』第329号・2006年刊）

「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（5）」（同『経済理論』第333号・2006年刊）

「清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（6）」（同『経済理論』第335号・2007年刊）〔以下続刊〕

において不十分ながら考察を試みた。

後世之人，仰其德而思慕之不忘哉，<sup>②</sup>

- ① 題目の朱注に「此言前王所以新民者，止於至善，能使天下後世，無一物不得其所，所以既沒世而人思慕之，愈久而不忘也」。

- ② ①参照。

蓋謂，有周之興，文武之爲君也，<sup>①</sup>

- ① 朱子「中庸章句序」に「聖聖相承，若成湯・文・武之爲君，皐陶・伊・傅・周・召之爲臣，既皆以此而接夫道統之傳」。

以聖繼聖，以盡爲君之道者備矣，

建功立業，以貽後人之謀者至矣，<sup>①</sup>

- ① 『禮記』表記に「詩云，豐水有芑，武王豈不仕，詒厥孫謀，以燕翼子，武王蒸哉」として『詩經』大雅・文王有聲の詩を引用し，その鄭注に「……詒，遺也……乃遺其後世之子孫，以善謀（詒は遺なり……乃ち其の後世の子孫に遺るに，善謀を以てし……）」。

是故

「不顯惟德，百辟其刑之」<sup>①</sup>，此文武德業之盛也，<sup>②</sup>今也文武既已往矣，而其德業之盛，則不與之俱往，後賢仰之，而思有以宗其德焉，

「燕及皇天，克昌厥後」<sup>④</sup>，此文武覆育之恩也，<sup>⑤</sup>今也文武既已遠矣，而其覆育之恩，則不與之俱遠，後王念之，而思有以保其緒焉，<sup>⑥</sup>

故曰，「君子賢其賢，而親其親」<sup>⑦</sup>者此也，

- ① 『詩經』周頌・烈文に「不顯維德，百辟其刑之（<sup>あきらか</sup>顯ならさんや維れ德，百辟其れ之に<sup>のつと</sup>刑る）」。

- ② 『大學或問』（「曰，引烈文之詩，而言前王之沒世不忘，何也」条）に「賢其賢者，「聞而知之」（『孟子』盡心下），仰其德業之盛也，親其親者，「子孫保之」（『中庸』），思其覆育之恩也」。

- ③ 『莊子』雜篇・天下に「與之俱往」。

- ④ 『詩經』周頌・雝に「燕及皇天，克昌厥後（<sup>やす</sup>燕んじて皇天に及び，克く厥の後を<sup>さかん</sup>昌にす）」。

- ⑤ ②参照。

- ⑥ 『朱子語類』卷十六・大學三に「問，君子賢其賢而親其親。曰，如孔子仰文・武

之德，是「賢其賢」，成・康以後，思其恩而保其基緒，便是「親其親」木之」。

⑦ 題目『大學章句』傳第三章・第五節。

「懷保小民，惠鮮鰥寡<sup>①</sup>」，此文武之所以安民也，今也文武不可見矣，而其安民之功猶在，後世之民，含哺鼓腹<sup>②</sup>，莫不賴之以遂其生焉，  
 「制其田里，教之樹畜<sup>④</sup>」，此文武之所以利民也，今也文武不可作矣，而其利民之惠猶在，後世之民，畊田鑿井<sup>⑤</sup>，莫不賴之以得其養焉，  
 故曰「小人樂其樂，而利其利」者此也，<sup>⑥</sup>

① 『書經』無逸に「懷保小民，惠鮮鰥寡（小民を懷保し，鰥寡を惠鮮す）」。

② 『莊子』外篇・馬蹄に「含哺而熙，鼓腹而遊（哺を含みて熙<sup>たの</sup>しみ，腹を鼓いて遊ぶ）」。

③ 『中庸章句』（第一章・第五節）「致中和，天地位焉，萬物育焉」の朱注に「育者，遂其生也」。

④ 『孟子』盡心上に「其制田里，教之樹畜（其の田里を制して，之に樹畜を教う）」。

⑤ ②参照。

⑥ 『詩經』周頌・烈文。また，題目『大學章句』傳第三章・第五節。

曰賢曰親，有以見前王之德，愈久而不忘<sup>①</sup>，

曰樂曰利，有以見前王之德，愈遠而不息，

① 題目『大學章句』傳第三章・第五節の朱注に「愈久而不忘」。

不惟當世之人得其所<sup>①</sup>，後世之人，亦莫不得其所，文武新民之止於至善也，爲何如哉（『欽定四書文』欽定化治四書文・大學・一葉・「君子賢其賢而親其親 二句」条）。

① 『大學章句』「右傳之十章，釋治國平天下」条の朱注に「……能如是，則親賢樂利各得其所，而天下平矣」。

題目の「君子賢其賢，而親其親，小人樂其樂，而利其利」は，その直前の截去された「詩云，於戲，前王不忘（詩に云う「於戲，前王 忘れられず」）」の解釈の部分にあたる。そこで，李時勉は破題で「即後世思慕之心，知前王新民之德（後

世の思慕の心に即きて、前王の新民の徳を知る)」とこの題目を破き、承題の部分で「此子曾子言（此れ子曾子が言う）」として朱注の、

前王とは、文武を謂うなり。君子とは、其の後賢・後王を謂い、小人は後民を謂うなり。此れ言うところは、前王 民を新たに<sup>と</sup>する所以の者は至善に止まり、能く天下後世をして一物も其の所を得ざること無からしむ。既に世を歿して、人 之を思慕し、愈々久くして愈々忘れるざる所以なり。

に基づいて、「文武新民之止於至善也、使文武新民之功、不止於至善、又焉能使後世之人、仰其徳而思慕之不忘哉（文〔王〕・武〔王〕の新民の至善に止まるなり。文〔王〕・武〔王〕の新民の功をして、至善に止まらざらしむれば、又た焉んぞ能く後世の人をして、其の徳を仰ぎて思慕の忘れざらしめんや）」と書く。そして、題目の「其」字は文王・武王を指していると理解して、その後のいわゆる八股の部分で、『詩經』・『書經』・『孟子』（「此れ子曾子が言う」とする八股文に、曾子より後の孟子の言葉をあからさまに用いるのは、清代では減点の対象となる）を引用して、題目の「其賢」「其親」「其樂」「其利」に重点を置いて解説する。

こうした李時勉の書き方が、

本題の重きは「前王」の「君子」「小人」の處に繫屬（結びつける）するに在り。是の作 亦た最も釋詩の體に合す（『欽定四書文』欽定化治四書文・大學・二葉・「君子賢其賢而親其親 二句」条評語）。

という『欽定四書文』での評価となる。「其」字が文王・武王のことを指すとして、「前王（文王・武王）」を「君子」「小人」に結びつけて八股文を書いたことと、いわゆる八股の部分で「詩云、於戲、前王不忘」をうまく解釈したことが評価されるのである。ただ、明記した出典からも理解できるように、ほとんどが經傳やその注に基づいたものであり、顧炎武のいう「傳注を敷衍するに過ぎ」ないものであろう。

ちなみに、『欽定四書文』の三十年後に刻された汪鯉翔の『四書題鏡』（乾隆三十五年（一七七〇）刊）は、この題目を次のように理解すべきだと述べる。

此れ是れ釋詩の體なり。須く上の「不忘」を承けて局に入るべし。後は須く「不忘」を喝<sup>さけ</sup>び起すべし。是れ泛く論贊を作らず。凡そ題とは、上文の推原と爲り、下文の起案と爲る者なり。遽<sup>にわ</sup>かに上文を繳<sup>ま</sup>る可からず、下を得<sup>また</sup>げるを恐れればなり。下文を對照せざる可からず、上を隔つを恐れればなり。[この] 題 「君子」・「小人」を重んぜず、只だ「前王」を重んず。須く四つの「其」字を以て主と爲し、[「其」字が]「前王」[を指していること]を見るべし。能く「君子」・「小人」をして此の如くせしむれば、方<sup>まさ</sup>に章句の意を得て、方<sup>まさ</sup>に「不忘」の所以の故を對照す。[「其」字の] 下の「賢」・「親」・「樂」・「利」の四字は是れ「前王の民を新たにして、至善に止まる」(朱注)の處なり、須く實發すべし。[「其」字の] 上の「賢」・「親」・「樂」・「利」の四字は是れ後人の新民に沐し、至善に止まるの餘澤なり。須く唱嘆傳神①すべし(『四書題鏡』大學・十三葉～十四葉・「君子二句」条)。

- ① 傳神：光緒五年新鐫『初學題類文法合編』に「〔傳神〕神は宜しく強旺なるべし、宜しく清秀なるべし、宜しく幽閒なるべし。一題手に到れば、必ず我の精神を聚め、古人の精神を會す。斯れ古人の胸臆<sup>か</sup>を寫くこと、己の胸臆を寫くが如くす。字字の精神、語語の精神、洋洋灑灑(豊富で明快)として、心膽 俱に張る。豈に快事に非ずや」(『初學題類文法合編』下卷・六葉・「傳神」条)。

題目の「君子賢其賢、而親其親、小人樂其樂、而利其利」にある四つの「其」字は、「前王(文王・武王)」を指しているので、「君子」・「小人」を重視せず、「前王(文王・武王)」を重視すべきだというのである。おそらく、この題目は、明代・清代を通じて、李自勉のように理解して八股文を書くのが定式であったのであろう。

## ②楊慈

『欽定四書文』は、楊慈(字は惠叔。福建莆田の人。永樂九年辛卯科〔一四一一〕二甲一名の進士：『制義叢話』(卷之四)によると、三十歳で亡くなったた

め、この八股文が伝わるのみであるという)の「武王纘太王 一節」文を、  
 此れ明の文の始基たり。一代の作者の正變(変化)源流(流れ)の法 包  
 孕せざるはなし。其の文 炳蔚(鮮明で美しい)として、確として開國の  
 氣象有り。○士人 經史を窮探し、僅かに其の詞と法とを取りて、時文の用  
 と爲すのみ。然れども制義の初體の此の如きを觀れば、亦た「根の茂きは、  
 實<sup>み</sup> 遂<sup>し</sup>ぐ」①の誣<sup>し</sup>う可からざるを知る可きなり(『欽定四書文』欽定化治  
 四書文・中庸・「武王纘太」条・十一葉)。

①韓愈「答李翊書」に「根之茂者、其之實遂(根の茂き者は、其の實  
 遂ぐ)」。

と評する。

この「明の文の始基たり」とされる「武王纘太王 一節」文は次のようなものである。題目は、

武王纘太王・王季・文王之緒、壹戎衣而有天下、身不失天下顯名、尊爲天子、  
 富有四海之内、宗廟饗之、子孫保之(『中庸』第十八章・第二節)。

の太字の箇所である。

惟聖人能繼先業以成武功<sup>①</sup>、故能得聲譽之盛<sup>②</sup>、而備諸福之隆也、  
 夫前人之所爲、後人之所當繼也、苟不能然、則名且不足、尚何諸福之有哉、  
 古之人有行之者<sup>③</sup>、其有周之武王乎、

①『詩經』大雅・文王有聲に「文王受命、有此武功」。

②『孟子集注』告子下「淳于髡曰、先名實者、爲人也……」条の朱注に「名、聲譽也、  
 實、事功也」。

③『孟子』梁惠王下に「孟子對曰、取之而燕民悅、則取之。古之人有行之者、武王是  
 也。取之而燕民不悅、則勿取。古之人有行之者、文王是也」。

自今觀之、太王肇荒作之基<sup>①</sup>、王季勤王家之事<sup>②</sup>、則周之王業、固始於此矣、  
 文王誕膺天命之隆<sup>③</sup>、以撫方夏之衆<sup>④</sup>、則周之王業、已創於此矣、

①『書經』周書・武成に「至于太王、肇基王迹、王季其勤王家、我文考文王、克成厥  
 勳、誕膺天命、以撫方夏(太王に至り、肇めて王迹を基し、王季 其れ王家に勤

め、我が文考・文王、克く厥の勳を成し、誕に天命に膺り、以て方夏を撫す」。

また、李光地の『程墨前選』や王汝驤の『明文治』は「太王肇荒作之基」を「太王有翦商之志」に作る。

② ①参照。

③ ①参照。

④ ①参照。

然太王王季雖爲王業之始、而其功則未成也、所以繼其業者、非武王乎、

文王雖有造周之名、而大勲則未集也、所以承厥志者、非武王乎、

武王於是因累世締造之功、而爲一旦弔伐之舉、

牧野之師方會、而前徒已倒戈、

華陽之馬旣歸、而天下遂大定、

則前人之業、於是而始成、

而前人之心、於是而始慰矣、

- ① 『書經』周書・秦誓上に「皇天震怒、命我文考、肅將天威、大勲未集（皇天震怒し、我が文考（文王）に命じ、肅みて天威を將わしむるに、大勲 未だ集らず）」。
- 『書經』周書・武成に「惟九年、大統未集、予小子、其承厥志（惟れ九年、大統未だ集らず、予が小子、其れ厥の志を承く）」。

② ①の『書經』周書・武成参照。

- ③ 『書經』周書・武成に「既戊午、師逾孟津、癸亥、陳于商郊、俟天休命、甲子昧爽、受率其旅若林、會于牧野、罔有敵于我師、前徒倒戈、攻于後、以北、血流漂杵、一戎衣、天下大定（既に戊午、師 孟津を逾ゆ、癸亥、商郊に陳し、天の休命を俟つ、甲子昧爽、受 其の旅を率いること林の若し、牧野に會す、我師に敵する有る罔し、前徒 戈を倒にして、後を攻め、以て北げ、血 流れて杵を漂わす、一たび戎衣して、天下 大いに定まる）」。

- ④ 『書經』周書・武成に「厥四月哉生明、王來自商、至于豐、乃偃武修文、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服（厥の四月哉生明（三日）、王 商より來りて、豐に至る、乃ち武を偃せて文を修め、馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放ち、天下に服せざるを示す）」。

⑤ ③参照。

夫以武王伐紂、宜若失其名也、然人皆知其爲應天順人之舉、而無利天下之心、



則武王之名於是而益顯，

①『周易』革卦彖傳に「湯武革命，順乎天而應乎人，革之時大矣哉」。

當是時也，四方攸同，皇王維辟<sup>①</sup>，則天下之民，莫非其臣<sup>②</sup>，其尊又何如，

東西南北，無思不服<sup>③</sup>，則四海之地，莫非其有<sup>④</sup>，其富又何如，

①『詩經』大雅・文王有聲に「四方攸同，皇王維辟（四方の同する攸<sup>ところ</sup>，皇王 維れ辟なり）」。

②『孟子』公孫丑上に「尺地莫非其有也，一民莫非其臣也」。

③『詩經』大雅・文王有聲に「鎬京辟廱，自西自東，自南自北，無思不服（鎬京の辟廱，西より東より，南より北より，思いて服せざるは無し）」。

④ ②参照。

由是而祀乎其先<sup>①</sup>，則假哉皇考，綏予孝子<sup>②</sup>，莫不以格而以享，

由是而傳之於後，則穆穆皇皇<sup>③</sup>，宜君宜王，莫不是繼而是承，

①『中庸』第十九章・第六節に「宗廟之禮，所以祀乎其先也」。

②『詩經』周頌・雝に「假哉皇考，綏予孝子（假<sup>かな</sup>なる哉 皇考，予れ孝子を綏<sup>やす</sup>んず）」。

③『詩經』大雅・假樂に「穆穆皇皇，宜君宜王（穆穆皇皇として，君に宜しく王に宜し）」。

則聲譽之盛，諸福之隆，武王一身萃之而有餘矣，雖然，自非其能繼先業以成武功，又何以臻此哉，」

夫武王能成變伐之功<sup>①</sup>，

於天下未定之時，周公能制典禮之懿，

於天下既定之後，武王以武周公以文，

其爲繼述，則一而已，

①『詩經』大雅・大明に「保右命爾，變伐大商（保右して爾に命じ，大商を變伐せしむ）」。

噫，莫爲之先，後將何述，莫爲之後，前將何傳，夫以太王・王季・文王既有以作之，而武王・周公，又有以述之，吾於是不惟有以贊武王能成之孝，而文王之所以無憂者，亦於是見矣（『欽定四書文』欽定化治四書文・中庸・十葉～十一葉・「武王纘太王 一節」条）。

清代では、楊慈のこの八股文はすぐれた解釈を示したことが評価された。清の李光地（字は晉卿，号は厚庵，別号は榕村，諡は文貞。福建安溪の人。明・崇禎十五年〔一六四二〕～清・康熙五十七年〔一七一八〕。康熙九年庚戌科〔一六七〇〕二甲二名の進士）は、次のようにいう。

時文の名句は、詩・詞と同じからず。性命の道理の上より出だすを要す。『中庸』の「續緒」節は、時文 皆な講じて三王の統緒は未だ成らず、武王に至り纔<sup>ようや</sup>く三王の志を了得（了解）すと成<sup>な</sup>す。竟に周家の父子祖孫は累世天位を闇干<sup>あんかん</sup>（盗み取る）せん①と欲する者に似たるに然り。豈に大いに悖るに非ざらんや。「續緒」なる者は、能く徳を修めて仁を行ない②，其の業を墮とさず，天と人とを得て歸すに到り，一（壹）たび戎衣を著て，便ち天下を有つを言うを知らず。故に臣を以て君を伐つと雖も，「顯名」を失わず。「一（壹）戎衣」句，上文を結ぶに非ず，乃ち下文を起こす。「一（壹）戎衣」を重んじ，「有天下」を重んぜず。惟だ明初の楊慈の文のみ是れ此の如く發明し，大いに關係（影響）有り。所以に八股文は輕忽（輕んじる）す可からざるなり（『榕村語錄』卷之二十九・十六葉～十七葉・詩文一）。

① 班彪「王命論」に「又況么麼不及數子，而欲闇干天位者乎（又た況んや么麼（微弱なこと） 數子に及ばず，而して天位を闇干せんと欲する者をや）」（『文選』卷五十二）。

② 『孟子章句』離婁上「孟子曰，天下有道，小徳役大徳……」章の朱注に「此章言，不能自強，則聽天所命，修徳行仁，則天命在我」。

「武王纘太王・王季之緒」の下「壹戎衣」句は，上文を承けるのではなく，下文を起こすものだという。もしも，上文を承けたのならば，「大王・王季の緒を纘いたので，戎衣して云々」となり，周は累世にわたって天子の位をうかがっていたことになってしまう。このことをはっきりとさせたのが，楊慈の「武王纘太王 一節」文であるというのである。

梁章鉅（字は閔中，又の字を菑林。号は菑鄰，晩年に退庵と号す。福建長樂の人。乾隆四十年〔一七七五〕～道光二十九年〔一八四九〕。嘉慶七年壬戌科〔一

八〇二〕二甲九名の進士〕は、『制義叢話』で、この李光地の発言を引用し、次のように続ける。

按ずるに……惟だ巳山（王歩青：字は巳山，又字は漢階，又た罕皆と称す。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年癸卯恩科〔一七二三〕三甲八十六名の進士）の評に「題に本より「顯名」を重んずるの義無し。〔楊慈の〕文 却って此れを拈り，中間の關鍵を作り，勝を制して奇を出だす。前後 之が爲めに一振す」と云うは，則ち眞に此の文の肯綮（急所）を説著す。李文貞（李光地）の意と交ごも相い發明す。但だ余（梁章鉅） 三たび此の文を復するに，其の中間の數語に云う「夫以臣伐君（『欽定四書文』は「以武王伐紂」に作る），宜若失其名也，然人皆知其爲應天順人之舉，而無利天下之心，則武王之名於是而益顯」と。巳山（王歩青）の稱する所は即ち此れなり。文貞の指す所も亦た即ち此れなり。然れども通篇 僅かに此の一截もて勝を制す。其の前後の際 實に文貞（李光地）の語と相い應ぜず。文貞（李光地） 此の意に就きて自ら一藝（八股文）を撰せざるを惜しむ（『制義叢話』卷之四・四葉）。

この八股文の要点は，題目の「不失天下之顯名（天下の顯名を失わず）」に着目し，「夫以臣伐君（『欽定四書文』は「以武王伐紂」に作る），宜若失其名也，然人皆知其爲應天順人之舉，而無利天下之心，則武王之名於是而益顯（夫れ臣を以て君を伐つは，宜しく其の名を失うが若かるべきなり，然れども人皆な其の天に應じ人に順うを爲すの舉にして，天下を利するの心無きを知れば，則ち武王の名 是に於いて益ます顯かなり）」と書いたところである。ただし，李光地の指摘に合致するのは，この句のみであるという。

そもそも清朝の李光地は，すぐれた八股文は，經傳を補佐できるものであるととらえていた。

蓋し制義（八股文）は一代の取士の制と爲すのみを論ずる無く，其の精なる者は，經傳を羽翼し，至れる者の語は經の如し（『榕村語錄續集』卷十九・十四葉・詩文）。

こうした見解は、だいたい清朝一代を通じて踏襲される。これは明末に八股文が時事評論のようになり、それを清朝になって取り締まったことに原因するのではないかと考えられる<sup>(3)</sup>。

清朝になって八股文の經書解釈の側面が重視されてくようになると、『中庸』解釈に僅かではあるが新しい側面を持ち込んだように見える楊慈の八股文が評価されるようになるのは、当然の流れであろう。清朝では、おおむね李光地のような解釈で、この題目を理解して八股文を書いていたようである<sup>(4)</sup>。『四書題鏡』(乾隆三十五年〔一七七〇〕刊)は、次のように述べている。

……「績」は亦た只だ其の「肇基」①・「其勤」②と「三分有二」③なる者とを繼ぐのみ。原より人の天下を取るを以て「緒」と爲すに非ず。故に『[四書] 蒙引』④に云う、「績緒」は、未だ天下を有たざるの前に就きて説く。「一（壹）戎衣」は却て是れ後日の事なり、と。首句は斷つに當に劃ちて看るべし。天下を有つを以て「績緒」の實と爲す可からず。太王・王

(3) 大結の禁止などもそれにあたる。そもそも、明代は、八股文の最後に大結を置きその箇所で時事を論じることがあった。しかし、清の康熙帝の時にこの大結は禁止される。商衍鑾(字は藻亭、号は又章、または冕臣。晩年には康樂老人と自称する。廣州駐防の正白旗漢軍出身。一八七五年～一九六三年。光緒三十年〔一九〇四〕甲辰恩科の一甲三名(探花)の進士)は、次のようにいう。

明人 篇末に大結を用いて、時事に及ぶ可し。「世宗(嘉靖帝)の嘉靖二十二年(一五四三)癸卯、葉經(字は叔明、號は東園。浙江上虞の人。嘉靖十一年〔一五三二〕壬辰科三甲二十一名の進士)山東に巡按たりて、郷試の「無爲而治者、其舜也與夫何爲哉、恭己正南面而已矣」(『論語』衛靈公)題の程文を作り、大結の内に「繼體<sup>な</sup>の君、未だ嘗て承く可きの法無くばあらず、但だ德 至聖に非ざれば、未だ聰明と作るも以て舊章を亂すを免れず」等の語有り。[傍系から帝位に即いた]世宗(嘉靖帝)之を見て大いに怒り、以て讖諛と爲し、逮訊(逮捕尋問)され、杖下に斃る」(『制義叢話』卷五・六葉所引の『四勿齋隨筆』)。<sup>1</sup> [葉經の作った]按語 並びに急切ならず、而して意も亦た空論なりて、竟に時君の暴威に触る。後より皆な草率(いいかげん)に従事す。而るに不肖の徒、又た毎に此に於いて關節を暗藏す。清の康熙の時に至りて懸(公布)して厲禁と爲す、而して大結 遂に廢る①(『清代科舉考試述録』第七章 八股文、試帖試概紀及舉例釋義 第二節 八股文之文體・二三四頁：生活・讀書・新知三聯書店・一九八三年第二次印刷)。

① 嘉慶九年『欽定科場條例』に「康熙十六年に議もて准<sup>う</sup>けたるに、郷[試]・會[試]の應試するの諸生の文字の中、概して大結を作すを許さず」(『欽定科場條例』卷十五・鄉會試藝・二葉)。

季・文王の臣節に于いて<sup>さまた</sup>碍げ有るを恐れればなり。若し必ず「績緒」を以て下載に粘せば、武王をして終身侯服せしめ、將に竟に「績緒」を爲す得ず。此れに據りて、首句は宜しく『[四書] 蒙引』に依りて講ずべし（『四書題鏡』中庸・「武王節」条・三十四葉）。

①『書經』武成に「至于大王，肇基王迹，王季其勤王家（大王に至りて，肇めて王迹を基し，王季<sup>もと</sup>其れ王家に勤む）」。

② ①参照。

③『論語』泰伯に「三分天下有其二，以服事殷（天下を三分して其の二を有つ，以て殷に服事す）」。

（4）呂留良（又の名は光輪，字は莊生，号は晩村。浙江石門の人。明・崇禎二年〔一六二九〕～清・康熙二十二年〔一六八三〕。順治十年〔一六五三〕の諸生）は，異なる解釈を示している。

「績緒」は専ら「商を翦つ」の一事を指す。然るを得ざれば，却って脱離し，「肇基王迹」を得ず。徳功を兼ねて言えば，即ち「商を翦つ」も亦た其の理勢の自然の道なりて，神器を圖謀するに非ざるなり。若し「商を翦つ」の説を避けんと欲し，専ら周家の忠厚・積累仁徳を指して言えば，則ち其の緒は直ちに后稷より来る。何を以て獨り太王に始まらんや。總じて是れ豎儒の眼中に「商を翦つ」は是れ大逆不道の事と看得す。是に於いて曲げて之が説を爲して，反って聖人の心事を將って枝梧（言葉を濁す）を装成し，闇昧不道とす。太王・武王の爲す所は皆な天理の至道なり。何ぞ罪過有らん。後儒の解に頼りて免れんや（呂留良『四書講義』卷二十六・「第十八章」条・八葉）。

八股文作成者の心理として，どうしても試験官の目に留まる文章を書きたい。呂留良のように目先を変えた解釈を書くと，他の受験生とは異なるものとなり，おおいに効果がでてくる。呂留良の解釈には，意表をつくものが多く，当時の受験生たちに流行した。これが，呂留良の思想的な立場から導き出されたものなのかは分からない。しかし，雍正帝の時に，曾靜の獄が起こると，こうした解釈は批判の対象となる。呂留良の『四書講義』に批判を加えた『駁呂留良四書講義』では，いまの箇所を次のように反駁する。

「積德累仁」①なる者は，太王・王季・文王の緒なり。亦た即ち后稷以來，相い傳うの緒なり。只だ太王に及び<sup>うや</sup>，后稷に及ばざる者は，夏商の世に，周 曾て中ごろ衰う。太王に至り復興す。是に由り浸く盛んにして浸く昌かにして，直ちに文 [王]・武 [王] に至る，其の世代 近くして，事業 顯かなり。又た王の及ぶ所を追う。故に只だ太王以下を言うのみ。「商を翦つ」義と何ぞ干せん（『駁呂留良四書講義』中庸・四十一葉）。

①『韓詩外傳』卷七に「今夫子積德累仁，爲仁久矣」。

呂留良のような解釈，つまり周王朝はもともと武力革命の意志を持っていたと理解することを放置しておく，武力革命の容認にも発展しかねないことになる。反滿思想取締りの一環として書かれた『駁呂留良四書講義』が，呂留良のような解釈を否定するのは当然のことであった。

- ④ 明・蔡清（字は介夫，号は虚齋，諡は文莊。福建晉江の人。景泰四年〔一四五三〕～正徳三年〔一五〇八〕。成化二十年甲辰科〔一四八四〕二甲七十三名の進士）著。『四書蒙引』（卷三・中庸・「武王纘太王王季文王之緒」条）は「纘，繼也。緒，業也。此止謂繼世耳。一戎衣而有天下，却是後日事也」となっている。

このように楊慈の「武王纘太王 一節」文は，僅かではあるがそれまで言及されてこなかったことをはっきりさせたように見えるところが，清朝の人たちに高く評価された。ただし，ほとんどが經書を踏まえて書かれたものであり，やはり「傳注を敷衍するに過ぎ」ないといえるのではないだろうか。

（つづく）